

原 著

社会学者がヘーゲルから学ぶもの

加藤 幸信

【抄 録】

社会学が誕生してからすでに150年以上が経過したが、社会学はまだその創始者であるコントやスペンサーが目指した社会の全体像の提示に成功したとは言い難い状況にある。もちろん、社会の全体像の提示ということは大変困難なことではあるが、不可能だとは言えないであろう。

この社会の全体像の提示のための手掛かりは、コントやスペンサーのみではなく、哲学者であるヘーゲルにも存在する。ヘーゲルは思弁にふけた「哲学者」ではなく、現実の世界を究明しその全体像を提示しようとした真の哲学者である。そして、『歴史哲学』によって人類の歴史的発展の道程を明らかにし、『法の哲学』によって国家と社会の論理的二重性を史上初めて説いた人物であって、社会の考察においても一頭地を抜いた存在である。

このヘーゲルの業績はマルクス主義の系列に受け継がれ、マルクス主義は社会学にも大きな影響を及ぼした。しかし、彼らの代表者とも言えるエンゲルスが、必ずしもヘーゲルをきちんと受け継いだとも言えないのである。これは、エンゲルスがヘーゲルを唯物論的に改作したということではない。そうではなく、彼がヘーゲルの体系、その中核である絶対精神をあっさり否定してしまった結果、もろもろの問題が生じたということである。

したがって我々は、ヘーゲルにまでもどって彼の学を学び、それを指針として社会の全体像の提示を目指すべきである。

【キーワード】 社会学、ヘーゲル、哲学、コント、エンゲルス

I はじめに

社会学の創始者に関する見解は必ずしも一致はしていないが、一般に認められているようにフランスのオーギュスト・コントによって1830年代に創始されたものとすれば、社会学はすでに150年以上の歴史を有していることになる。しかし、その歩みはどうであったのかと言えば、必ずしも順調であったとは言い難い。現象的な華やかさとは裏腹に、その学問としての歩みはむしろ苦難の道であったと言うこともできよう。なにしろ現在に至るも、社会学の対象とするものが一体何かさえ、はっきりと確定したとは言い難い状況が存在するのであるから。

そもそも、社会学の創始者とされるコントが社会学の名において提唱した内容は何かといえば、現在社会学の主流となっている個別分野の研究ではなく、むしろ

ろそれらをも包括したところの社会全体に関わる学問であり、哲学ないしは社会哲学ともいべきものであった。このことは、社会学という名称を提示した彼の著作名が『実証哲学講義』であったという事実からもうかがえよう。こうした事情は、コントとならんで社会学の創始者とされるH・スペンサーにおいても同様であった。

しかし、この後の展開はどうであったかといえば、周知のようにE・デュルケイムやM・ウェーバーといった社会学史を飾る巨人が登場し、社会学は大きく発展していく。けれども、コントあるいはスペンサーのような社会全体、社会そのものの把握をめざしたいわゆる総合社会学は社会学の主流とはならなかった。むしろ、先行する他の社会諸科学の対象外であった宗教、家族といったさまざまな個別分野の研究が主流となり現在に至っていると見てよいであろう。(註1)

もちろん、社会そのものを把握しようという試みも続いたが、初期の頃から各人がそれぞれに自己の説を主張するという状態であった。たとえば社会発展の段階に関する見解にしても、コントが神学的、形而上学的、実証的という人類の精神の発展の三段階、それに対応する軍事的、法律的、産業的という社会の三段階を提唱したのに対して、スペンサーは軍事型社会から産業型社会へという二段階説を唱えた。そして、彼らがそれを肯定的に扱ったのに対して、F・テンニースはゲマインシャフトからゲゼルシャフトへという社会の移行を否定的に説いてこの克服を目指すという具合にである。最近では、T・パーソンズの非歴史的な均衡理論であるAGIL図式などが一世を風靡したことも記憶に新しいところである。

このように、社会学は各個別の分野では多くの研究者が業績を積み重ねている半面、社会そのものを扱えようとする試みは試行錯誤の連続であり、その結果社会学の大柱は据えられず、それが社会学の統一性、体系性の未成立を招いているように思われるのである。

では、この原因、解決策は一体どこに存在するのだろうか。これに答えることは、一社会学徒に過ぎない身としてははなはだ困難なことである。しかし、まず言えることは、仮に遠回りになってもコント、スペンサーといった社会学の創始者たちまで戻ってみて、彼らが何を志したかを学ぶことではないかと思われる。彼らは、残念ながら現在ではあまり高く評価されているとは言えない。しかし、彼らの説いた内容ともかく、社会そのものを丸ごと扱えようとした彼らの試み自体は非常に優れたものだったとすることができるのである。

更に、視点を広げるならば、個別分野における発展とは裏腹の原理面での混迷ということは、すでに哲学の分野で繰り返されてきたことであり、こと社会学に限ったことではない。(註2)

しかしながら、哲学は古代ではアリストテレスによって、そして近代ではヘーゲルによってと、二度にわたって壮大な体系を築き上げ不滅の業績を確立した歴史を有している。そして、草創期の社会学、社会そのものを丸ごと扱えようとした総合社会学が哲学的なものだったことも考えあわせれば、社会学の体系性確立の道への手掛かりが哲学の歴史の中に存在している

可能性が非常に高いと言えよう。事実、社会学の体系性確立への道の手掛かりは、社会学者の業績にのみ存在するのではなく、かの大哲学者ヘーゲルにも存在するのである。

本稿は、自らへの指針として社会学の体系性確立への道への手掛かりが探ろうとしたものであり、その手掛かりをコント、スペンサーといったいわゆる社会学の創始者の試みを踏まえて、大哲学者ヘーゲルに求めたものである。

< 1 >

先に述べたように、現在ではコント、スペンサーといった社会学の創始者たちはあまり高く評価されているとはいえない。社会学の創始者は誰かという問題にしても、彼らではなく、彼らの後に続くデュルケイム、G・ジンメル、ウェーバーといった人々だとする見解も存在する。これは、コントやスペンサーのいわゆる社会有機体説がまだ完成には程遠い段階であったことも一因であろうが、彼らが社会学者というよりは哲学者に近かったことも大きく関係していよう。彼らの手によるよりもむしろ、デュルケイム、ジンメル、ウェーバーといった人々の手によって、先行する他の社会諸科学とは異なる社会学の独自の領域が確立されていったのであり、社会学がより社会学らしくなっていったと言えるのである。

しかし、これを逆に扱えば、ここから全体を忘れて個別の分野にはいりこむ傾向が生じ始めていき、社会そのものを扱えようとする理論面での混迷が始まったとも言うこともできよう。これは、哲学の歴史が教えるところでもある。したがって、社会学の体系化への道の手掛かりは、デュルケイムらよりもむしろコント、スペンサーらにある可能性が高いのである。なぜならば、如何に困難ではあっても社会そのものを丸ごと対象として扱えようとしなければ、社会学の大柱は据えられず、その体系化は困難だと思われるからである。この意味でコントやスペンサーのいわゆる総合社会学は、内容に問題はあったもののその試みは高く評価すべきであろう。この彼らの良い面を受け継ぐことによって、彼らを現代的に再生することも可能になってくると思われる。

けれども、このように述べると、おそらく「社会を

丸ごと対象として把えようなどということは、口でいうのは簡単であるが、実際にはできることではない。だからこそ総合社会学以来の苦難の道があるのではないか。」という反論が提出されよう。

なるほど、社会を丸ごと把えようという試みは到底個人の手には負えることではなく、およそ不可能であるかのように思われる。しかし、学問の世界にそうした先例がないか尋ねてみれば、先に述べたように、学中の学ともいえる哲学の世界ではアリストテレス、ヘーゲルと二度にわたって社会のみならず自然、精神を含めた世界全体の体系の確立に成功しているのである。

もちろん、彼らのような偉大な天才と我々凡人とを同列において論じるわけにはいかないこともまた当然のことである。けれども、彼らが過去において自然、社会、精神のすべての分野において究明をおこない世界そのものを丸ごと把えた以上、我々が現在、社会そのものを丸ごと把えようとしても必ずしも失敗に終わるとは限らないであろう。なぜならば、我々は彼らに学ぶことができるのであるから。特に、ヘーゲルにはコントらの総合社会学を再生する手掛かりとなるものが存在しているのであり、もしコントがヘーゲルの残した遺産をきちんと学んでいたならば、彼の総合社会学はより見事なものになったと思われるのである。

しかし、それでは、我々は大哲学者ヘーゲルの何を学ぶべきであろうか、そして、哲学に学ぶということは、哲学を社会学に横滑りさせるだけに終わらないのであろうか。本稿ではこの学ぶべきヘーゲルの遺産とその学び方に焦点を当てて論じていきたい。

< 2 >

改めていうまでもないことではあるが、社会や国家に目を向け考察したのはコントやスペンサーが最初というわけではない。古くは古代ギリシアのプラトンから、近代以降ではマキャベリ、ホッブズ、ロック、ルソーなど多数の学者が巨峰の如く存在している。こうした巨峰の中でも一頭地を抜いた最高峰といえるのがヘーゲルである。

なぜヘーゲルが最高峰といえるかと言えば、まず第一に、彼がそれまで混同されていた国家と市民社会とをはじめ論理的に峻別し、その二重構造を明らかにしたからである。そして、第二に、『歴史哲学』等で

人類の歴史的発展過程を明らかにしたからである。これらをなし得たのは、現在のところヘーゲルにおいては存在しない。

ここからもわかるように、ヘーゲルは思弁をもてあそぶいわゆる哲学者ではなく、しっかりと現実を究明した真の哲学者なのである。コントが人類の精神の発展段階と社会の発展段階とを統一的に把えようとしたことは彼の特筆すべき偉業であるが、これはすでにヘーゲルが哲学の歴史と人類の歴史を踏まえてより緻密かつ論理的におこなっていることなのである。それは何かと言えば、ヘーゲルの全体系であり特に『哲学史』と『歴史哲学』なのである。

したがって、ヘーゲルに学ぶということは彼の遺産であるこの二つの偉業、すなわち『哲学史』と『歴史哲学』を中核にすえて学ぶということであり、いわゆる哲学の思弁を社会学に横滑りさせることには決してならないのである。

さて、このようにヘーゲル、そして特に彼の『歴史哲学』を持ち出すと、ひょっとしたら、次のような疑問の声があがるかもしれない。それは、「それでは、要するにヘーゲルをひとつの思想的源泉とし、それを唯物論の立場から受け継いで発展させてきたマルクス主義の系列を見習えということなのか。しかし、一方ではコント、スペンサーを持ち上げておいて、片方では彼らの社会有機体説を資本家階級の立場を正当化しようとするものだと攻撃してきたマルクス主義の系列につながることをいうのはおかしいではないのか。それとも、マルクス主義のように唯物論ではなくヘーゲルの観念論に戻れということなのか。」という疑問である。

というのも、ヘーゲルの遺産はドイツの社会学者、法学者であるL・シュタインにも受け継がれたとされるが、ヘーゲルの歴史観を受け継いで現実の世界においても学的世界においても巨大な流れを形成したのは、何といてもマルクス主義の系列だからである。この系列では、ヘーゲルの歴史観をマルクスが受け継いで唯物論的に発展させたといわれるいわゆる唯物史観が金科玉条のごとく把持され、各人が各様の説を唱えてきた社会学の系列とは好対照をなしている。そして、この系列が社会学にも大きな影響を与えた反面、コントらの社会有機体説等を批判してきたことも事実

なのであるから。(註3)

したがって、一方ではコントラを高く評価するかの
ようなことを言い、片方ではマルクス主義につながる
ヘーゲルの『歴史哲学』を持ち出したのでは、矛盾し
ていると、あるいはヘーゲルの観念論に戻れというこ
となのかと誤解される可能性がないでもない。それゆ
え、これに答えておく必要がある。また、これにつ
いて答えておくことがヘーゲルをどう学ぶかという問
いに対する直接の答えにもなるのである。

< 3 >

レーニンが説いているようにドイツ古典哲学がフラ
ンスの社会主義、イギリスの古典派経済学と共にマル
クス主義の源泉であり(註4)、そのなかでもヘーゲ
ル特にその『歴史哲学』がいわゆる唯物史観の源泉と
して大きな位置を占めていることは、あらためて断る
までもないことであろう。しかし、だからといって、
マルクス主義の系列がヘーゲルをきちんと受け継いで
きたか否かということはまた別の問題である。マルク
ス主義の系列はスペンサーを批判してきたが、彼の源
泉であるC・ダーウィンの進化論そのものは、エンゲ
ルスにより19世紀の三つの偉大な発見の一つとして高
く評価されているということもあるからである。(註
5)(なお、他の二つは細胞の発見、エネルギー転化
の法則である)

もちろんこれは、ヘーゲルを唯物論的に改作したの
がけしからんというようなことでは決してない。そう
ではなく、必ずしもヘーゲルを唯物論的にきちんと受
け継いだわけではないということである。エンゲルス
は、「ヘーゲルの哲学は、…その形式は批判的にこわ
されたが、この哲学のおかげで獲得された新しい内容
は救いだされた」¹⁾と述べているが、残念ながら、こ
の見解を必ずしも全面的に受け入れるわけにはいかな
いのである。したがって、本稿ではマルクス主義の系
列を受け継ぐというつもりはないのである。そうでは
なく、むしろ本稿で述べたいことは、マルクス主義の
系列が大きな業績を積み上げたことも事実ではある
が、ことヘーゲルを受け継ぐという点に関しては問題
点があったということである。したがって、その轍を
ふまないためにも問題点を明らかにしておく必要があ
るだろうし、先にも述べたように、そのことが直接に

ヘーゲルから如何に学ぶべきかにつながるのである。
その問題点とは主として二つあり、一つはエンゲルス
がヘーゲルの絶対精神をあっさり否定してしまった
ことであり、もう一つはヘーゲルの国家と市民社会の
論理的峻別を受け継がなかったということである。本
稿では、IIとIIIでこの二つの問題点について論じてい
きたい。

II

< 1 >

ここでは、ヘーゲル哲学の中核である「絶対精神」
をエンゲルスが理解しないままにあっさり批判して
しまったという問題について論じていきたい。エンゲ
ルスは晩年の著作いわゆる『フォイエルバッハ論』
(正確には『ルートビヒ・フォイエルバッハとドイ
ツ古典哲学の終結』)で、ヘーゲルの絶対精神(=絶
対的理念)を、「絶対的理念——これは、彼がそれにつ
いて何も語るができないかぎりにおいてだけ絶対
的なのである——」²⁾といった具合に手厳しく批判
している。

しかし、ヘーゲルが絶対精神そのものについては語
らないままに世を去ったのは事実であるが、これを語
れなかったのだと受け取ってはまずいのである。けれ
ども、これがレーニン以降のマルクス主義の系列にそ
のまま受け継がれてきたのである。

このように述べると、「それがどうした。絶対精神
などという実体のない観念論的なものは、唯物論の立
場からすれば否定して当然であろう。」という反論が
提出されよう。たしかに、絶対精神そのものが直接的
に実体を持つものとして存在するわけではない。しか
し、これはエンゲルスが絶対精神の代わりに提出した
一般的運動法則(後述の引用4参照)そのものが実体
を持たないのと同様である。ヘーゲルが絶対精神を精
神として説いたことは観念論的であっても、だからと
いって内容がない、語れないということにはならな
いのである。なぜならば、ヘーゲルの絶対精神は常に運
動形態にある世界そのものの本質を歴史的に把えたも
のでからである。つまり、この絶対精神がヘーゲル哲
学の中核であり彼の哲学体系を統括するものであっ
て、『哲学史』や『歴史哲学』はその柱なのである。

したがって、絶対精神を否定することは、その持

つ歴史性や体系性を否定することになりかねないのである。事実、歴史性については後述するが、体系性について言えば、エンゲルスは以下のように哲学の体系性を否定しているのである。

ヘーゲルとともに哲学一般は終わる。というのは、ヘーゲルが、一方では、哲学の全発展をその体系のなかでこの上なくみごとに総括しているからであり、他方では、無意識的にはあるが、体系のこのような迷宮からぬけだして世界の本当の実証的認識にいたる道をわれわれに示しているからである。下線は引用者³⁾

しかし、たとえばヘーゲルの『歴史哲学』についていうならば、これは『歴史哲学』として独立して存在するものではない。ヘーゲルは、彼の哲学体系の一環として歴史を究明して『歴史哲学』を講義したのであって、歴史を純粹に歴史として講義したわけではないのである。

したがって、ヘーゲルの哲学体系の一環として『歴史哲学』なりあるいは『法の哲学』なりを学ばなければ、これらを真に理解することはできないのである。(註6) 一体何が問題になってくるのかと言えば、歴史の発展がつながらなくなってしまうのである。たとえば、ヘーゲルは、『歴史哲学』のなかで、アジア的国家からギリシアへの移行に関して、内面的な推移を簡単に論じた後、以下のように説いている。

エジプトからギリシアへの内面的推移、いいかえると概念上の推移は以上のようにして行われた。しかし、エジプトはペルシア王国の一州となっていたから、歴史的な推移はペルシアの世界とギリシアの世界との接触するところに起こるのである。われわれはここではじめて歴史的推移、いいかえると国家の没落に立ち会う。すでに述べたように、シナとインドとは今になお存続しているが、ペルシアはそうではない。なるほど、ペルシアからギリシアへの推移は内面的なものではあるが、しかしそれはまた外面的でもある。外面的推移とはほかならぬ支配権の推移ということであって、この面は今後いつまでも繰り返される事実である。⁴⁾

ここでヘーゲルは、内面的推移（概念上の推移）と歴史的な推移（外面的な推移）とを論理的に分けた上で統一的に論じている。ここから推測できるように、『歴史哲学』はどちらかと言えば後者に比重がかけられているのである。これが、『歴史哲学』に事実的な記述が多いように見える理由でもあろう。けれども、外面的推移だけでは歴史はつながらないのであり、ヘーゲルに学ぶ場合はこの二つを統一して理解しなければならない。しかし、そのためには、特に内面的推移（概念上の推移）について学ぶためには、『歴史哲学』だけではなく全体系に学ばなければならない。ところが、絶対精神を否定するあまり体系性まで否定してしまったのでは、内面的推移（概念上の推移）を否定することになりかねず、結果として『歴史哲学』も真に学ぶことは困難になる。このヘーゲル哲学の中核である絶対精神を理解し、これを唯物論的に創りかえてはじめてヘーゲルを唯物論的に受け継いだことになるのである。

ここで、マルクス主義のいわゆる唯物史観について述べれば、若くして哲学的意識を清算してしまったマルクスは、そこまではヘーゲルに学ばなかったようである。(註7)

したがって、彼は、いわゆる唯物史観を定式化したとされる『経済学批判』の序言のなかで「大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョアの生産様式を経済的社会構成のあいつぐ諸時期としてあげることができる」(『経済学批判』 杉本俊朗訳 国民文庫 16頁)と説いているが、これはあくまでマルクス自身が述べているように経済的社会構成として説いているのであり、マルクスの問題意識からヘーゲルの『歴史哲学』を受け継いだものである。唯物論の立場に立った経済学的観点から説いてはいるが、ヘーゲルの歴史観そのものを唯物論的に改作したものではない。

ところが、絶対精神をあっさり否定してしまったエンゲルスは、こうした事情を考慮せず、マルクスの経済的社会構成の発展段階に関する見解を、唯物論の立場に立った経済学的観点からの社会観、歴史観とするのではなく唯物論的な歴史の見方と短絡させてしまい、これが我が国では「唯物史観」として定着したの

である。つまり、経済的な歴史の見方が歴史的な見方そのものにすり替えられてしまったともいえよう。

もっとも、これに対しては「エンゲルスが説いているように経済が人間社会の土台なのだから、経済的な見方を歴史的な見方として特に問題はあるまい」という反論が出るかもしれない。(註8)

しかし、現在では経済的なものが社会の土台といえるが、人類の歴史上においてすべてそうであったという保障はどこにもない。これは、それこそ歴史的に究明しなければならないことである。

しかも、土台=全体ではない。つまり絶対精神は経済とはレベルが異なるのである。経済は社会の極めて重要な要素とは言え、あくまで部分である。では、絶対精神は精神であるからこれも部分なのかといえ、ことヘーゲルにあっては、これは自然、社会、精神をつらぬくものであって決して部分ではないのである。

そしてここから、では経済以外のものの能動性、特に認識や精神の能動性はどうかというもう一つの問題が生まれる。つまり、ヘーゲルが『哲学史』等で説こうとしたものはどうか、ということである。エンゲルスは以下のように、ヘーゲルにあっては、現実とは絶対精神のつまらぬ模写であるかのように論じている。

……ヘーゲルでは、自然および歴史のなかに現れる弁証法的発展、すなわち、すべてのジグザクな運動と一時的な後退をつうじてつらぬかれている、低いものから高いものへ向かう進展の因果的連関は、永遠の昔から——どこでかはわからないが——ともかくどの思考する人間の頭脳とも独立に進行している概念の自己運動の、つまらぬ模写にすぎないのである。このようなイデオロギー的なさかだちは、除去しなければならなかった。⁵⁾

しかし、エンゲルスのいうようにヘーゲルでは現実が絶対精神のつまらぬ模写であるならば、ヘーゲルは何のために『歴史哲学』の講義を繰り返したのかということになる。けれどもそれ以上に問題なのは、エンゲルスがヘーゲルをこのように単純に把えてひっくりかえしたために、逆に認識、精神が模写レベルの反映に押し止どめられてしまい、その能動性が正しく評価

されていないということである。もっとも、これは逆にエンゲルスが認識、精神の能動性を見なかったために、絶対精神と現実との関係を単純化してしまったともいえるのであるが、いずれにせよ、これではヘーゲルを真に受け継ぐことはできないのである。

それゆえ、この点だけからすれば、経済的社会構成から社会を把えようとしたマルクス主義の系列よりも、人間の精神を重視し精神の発展と社会の発展を統一的に把えようとしたコントの方が優れているとも言えるのである。

< 2 >

エンゲルスが、ヘーゲルの絶対精神を理解しようとしないうちにあっさり否定してしまったことは、もう一つの大きな問題を生み出している。それは何かといえば、絶対精神をただ否定しただけではヘーゲルを唯物論的に克服したことにはならないということに関わる。したがって、天分豊かなエンゲルスが絶対精神を単に否定しただけで終わるはずはないのだが、問題はでは絶対精神の代わりに何を説いたか、である。先にもふれたが、エンゲルスは以下のように、一般的な運動法則、歴史の諸法則を絶対精神の位置に据えたのである。

……ヘーゲルの場合には、歴史は彼の絶対的理念の実現をめざして精をだしてきたのであり、そしてこの絶対的理念へと向かう不動の方向が、歴史上の出来事の内的連関をなしていたのである。……だからここでも、自然界でとまったく同じように、現実の連関を発見することによってこうした人為的連関をとりぞくことが必要であった。これは一つの課題であり、それは、結局人間社会の歴史のなかで支配的な法則として貫徹される一般的運動法則を発見することに帰着する。

……歴史の領域では無数の個々の意志や個々の行為が衝突する結果、無意識の自然を支配しているのとまったく類似の状態が生まれてくる。

……歴史上の出来事は、大体において、同じように偶然に支配されているように見えるのである。ところが表面で偶然がほしいままにふるまっている場合には、この偶然はつねに隠れた内的な諸法則に支

配されているのである。たいせつなのは、ただこうした諸法則を発見することだけである。⁶⁾

この箇所は、一見何の問題もないかのようにみえる。それどころか、むしろこれこそが科学的であり、エンゲルスの天才ぶりを示すものであるかのようにみえる。しかし、実は大きな問題が潜んでいるのである。

それは何かといえば、紙数の関係でここでは結論だけになってしまうが、エンゲルスがヘーゲルの絶対精神を一般的運動法則に置き換えることによって、絶対精神が有していた歴史性までも一般性に置き換えてしまったということである。(註8)

したがって、エンゲルスにあっては、先に論じた認識、精神の能動性の問題とも絡むことであるが、歴史の見方が極めて単純化されてしまった。上記の引用文に見られるように、「歴史の領域では無数の個々の意志や個々の行為が衝突する結果、無意識の自然を支配しているのとまったく類似の状態が生まれてくる」と自然の法則と社会の法則との事実上の同一視とすられようなことを述べているのである。

しかも、ここで看過できないことは、このように個人を全面に出してしまえば、社会は個人の集合体ということになり、実質的に社会が個々に解消されてしまうということである。しかし、これは次の項で論じることにはしたい。

III

< 1 >

第二の問題点は、マルクス主義の系列は、ヘーゲルの国家と市民社会の論理的峻別を正しく受け継がなかったということである。ヘーゲルにあっては、以下のように国家が基本的存在であり、国家の内部において市民社会が誕生するのである。

……それゆえ現実の世界においては、国家こそ総じてむしろ最初のものであり、国家の内部においてはじめて家族が市民社会へと発展するのであって、国家の理念そのものがこれら両契機へおのれを区分するのである。⁷⁾

この国家と市民社会の二重構造はヘーゲルがはじめに指摘したものであり、それまでは両者が混同され、社会は人為的な結合の結果できたものとしてしか、つまり国家や社会の前に個人が存在するとしか考えられていなかったのである。これに対して、ヘーゲルは以下のようにはっきりと、論理的には個人よりも国家が先だと宣言しているのである。

国家が市民社会と取りちがえられ、国家の使命が所有と人格的自由との安全と保護にあると決められるならば、個々人としての個々人の利益が彼らの合一の究極目的であるということになり、このことからまた、国家の成員であることはなにか随意のことであるという結論がでてくる。

しかし、国家の個人に対する関係はこれとはぜんぜん別のものである。国家は客観的精神なのであるから、個人自身が客観性、真理性、倫理性をもつのは、彼が国家の一員であるときだけである。合一そのものがそれ自身、諸個人の真実の内容であり、目的であって、諸個人の使命は普遍的生活を営むことにある。⁸⁾

そして、以下のように個々人の特殊な欲求を普遍性として実現する場が市民社会だとしているのである。

特殊的人格としての自分が自分にとって目的であるところの具体的人格が、もろもろの欲求のかたまりとして、また自然的必然性と恣意の混合したものとして、市民社会の一方の原理である。——ところが特殊的人格は、本質的に他人のこのような特殊性と関連している。したがってどの特殊的人格も、他の特殊的人格を通じて、そしてそれと同時に、まったく普遍性の形式というもう一方の原理によって媒介されたものとしてだけ、おのれを貫徹し満足させるのである。⁹⁾

その上でヘーゲルは、根本的には通常いわれているように権力によって国家が成立させられているのではなく、人間がもともと国家的(社会的)存在であることを、観念論的に以下のように表現している。

のである。

権力によってこそ国家は結合を保つ、としばしば考えられているが、しかし、この結合を保つものはひとえに万人のもっている秩序についての基礎感情なのである。¹⁰⁾

このように把えないと一体何がまずいのかといえ、人間が社会的存在であること（市民社会的存在だということではない。ヘーゲル流に言えば国家的存在であることである）を真に把握することができず、実質的にヘーゲル以前の社会契約説に戻ってしまうということである。これに関してもヘーゲルは以下のように論じている。

もし国家がさまざまな人格の一体性、ただ共同性であるにすぎないような一体性と考えられるならば、これによって考えられているのは、市民社会の規定にすぎない。近代の国法学者の多くは、これ以外の国家観にこぎつけることはできなかったのである。¹¹⁾

< 2 >

ところが、マルクス主義の系列では、上記のヘーゲルの貴重な遺産が国家と市民社会の二重化と把えられたまではよかったものの、ヘーゲルとは逆に特殊利益をめぐっての闘争の場である市民社会が土台だとしてしまったのである。つまり、市民社会における対立が国家（権力）を生み出したとされたのであり、対立すなわち階級闘争から歴史が説かれることになったのである。これは、国家暴力機構説を唱えたレーニンによって典型的に説かれているが（註10）、その源はエンゲルスにも存在するのであり（註11）、彼によって社会が個人に実質的に解体されていることは既にIIでみた通りである。

では、どうしてエンゲルスらのように把えてはまずいのだろうか。それは、まず第一に、市民社会が土台であるかのように現象しているのは近代以降の特殊性であり、国家、社会の一般性ではないということである。ところが、エンゲルスにはIIの（註8）でも多少ふれたことであるが、以下のように近代以降の特殊性をそれ以前にまで当てはめようとする傾向が存在する

ところで、以前のすべての時代には、歴史のこのような推進的原因を研究することは——この原因とその結果との連関がこみいっており、おおいにかくされていたために——ほとんど不可能であったが、現代はこの連関を単純化したので、その謎が解けるようになった。¹²⁾下線は引用者

しかし、巨大な生産手段と交通手段とをもっている現代においてさえ、国家が独自の発展をとげる自立した一領域ではなく、その存立も発展もけっきよは社会の経済生活の諸条件から説明されなければならないとすれば、人間の物質的生活の生産がまだ今日ほど豊富な補助手段をもって営まれておらず、したがってこの生産の必要性がもっと大きな支配力を人間におよぼさずにはすまなかった以前のすべての時代にとっては、このことは、ずっとよくあてはまるにちがいない。¹³⁾下線は引用者

つまり、エンゲルスは近代社会に焦点を当てたために、事実上近代社会の特殊性である市民社会の問題しかみていないのである。その結果、市民社会の問題である階級闘争が大きくクローズアップされることになったのである。（もっともこれは逆に階級闘争が大きくクローズアップされたためだといった方がよいであろうが）。たしかに階級闘争は大きな問題ではあるが、これから社会を把えてしまうと、社会を最初から分けて把えることになってしまい、統一的に把えることが難しくなってしまう。もし、エンゲルスの言うように人類の歴史は階級闘争の歴史であるとし、それに忠実であろうとするならば、社会の歴史は階級闘争の発展史ということになってしまうのである。もっとも、これに関しては歴史的な考察が必要であり、ここでこれ以上述べることができない。

< 3 >

第二の問題点は、より本質的なことであるが、人間の社会はエンゲルスのいうように、バラバラな個人が集まっているわけではないということに関わる。人間は本質的に社会的存在であり、論理的には社会が先なのである。もちろん、人間抜きで社会は存在しないが、人間が個人の感情にいわば目覚めるのは、社会の誕生の後のことである。社会はまとまっているというよりも、まとまったままでいざるをえないのであり、社会の発展に伴って分裂の可能性が生じたのである。

エンゲルスが説くように、人間がばらばらの存在であったならば、相手の心さえもわからずまとまりようがなくなってしまうのであって、人間の社会はただ単に権力によって力づくで統括されているわけではないのである。人間社会には、ヘーゲルというところの「万人のもっている秩序についての基礎感情」が存在するのである。いうまでもなく、原始社会といえども、この「基礎感情」だけで社会がまとまり続けるというわけではない。しかし、如何に国家権力が強大になろうとも、階級闘争が前面にでて現象しようとも、この「基礎感情」を無視してはならず、大事なことは、このヘーゲルが説く「基礎感情」を唯物論的に把え返して説き直すことである。

人間が社会的存在であることは、まだ20代の若きマルクスがすでに『フォイエルバッハに関するテーゼ』に記していることであり、マルクス主義の系列が強調してきたことである。(註12)

しかし、社会そのものの把え方、国家と社会との関係の把え方は、エンゲルスにみられるように必ずしもヘーゲルほどに厳密ではなかったのである。これはエンゲルスがヘーゲルほどには歴史の研鑽を積まなかったこと、既にのべたように近代のあり方から過去を見ようとしたことが一つの要因だと思われる。

けれども、これでは過去の社会の特殊性が見えなくなってしまい、現象的な近代へのつながりは見えるものの、逆に近代への本当のつながりは見えなくなってしまうのである。なぜ現象的には近代へのつながりが見えるかといえば、近代でいわば大きく開花発展したものは、それがいくら近代の特殊性とはいえ、過去にも萌芽形態ないしはそれ以上のものが存在する可能性

が高いからである。したがって、現象的に連関を把えるのではなく、近代における開花、発展を近代の特徴と把え、それが何故かを究明することが近代社会の究明につながるのである。近代の特徴を現象的に過去からの単純な連続性で把えてしまうと、これこそ社会の本質ということになりかねない。

少し議論がずれるが、これがエンゲルスの「階級闘争史観」にたいして、近代社会以降はともかく、近代以前の社会では階級闘争が社会発展の根本的原動力ではないという反論が提出される所以であろう。なぜならば、たしかに近代以前の社会においても階級闘争があったとも言えるが、主要な原動力でなかったとも言えるからである。これにきちんと決着をつけるには、近代社会からではなく歴史的な社会そのものを歴史的に考察し、その特殊性と普遍性を解明しなければならない。そうでなければ、主要な原動力に見えないのはまだ開花、発展していないだけだ、ということにもなりかねないからである。

IV おわりに

さて、いささかエンゲルスの批判ととられかねないような展開になってしまったが、本稿の目的はもちろんそのようなところにあるのではない。何といても、エンゲルスはヘーゲルの弁証法を三法則にまとめあげたという偉大な業績があり、これは歴史に残る不滅の業績といって何ら過言ではないからである。また、マルクス、エンゲルスは言うまでもなく、それ以外のマルクス主義の系列に属する人々もまた大きな業績を積み上げてきたこともこれまた否定のしようがない事実である。

しかし、彼らマルクス主義の系列が、ヘーゲルを一つの源泉としてそこから大きく発展してきたことは事実であるが、こと社会と国家の把え方そのものに関してはヘーゲルよりも後退しているのである。そして、マルクス主義の最大の啓蒙家は何といてもエンゲルスであることを考えれば、エンゲルスにふれないわけにはいかず、これが直接にヘーゲルの学びかたにもつながっているということなのである。

ヘーゲルに比してのエンゲルスの問題点をいくつかあげたが、これは根本的にはエンゲルスの生きた時代が資本主義の草創期であったことが大きく影響してい

よう。つまり、エンゲルスの時代には資本主義社会に関する事実が、いささか観念論的に言えば勢いよくおどり出てきたのではあるが、といて事実がでそろったわけにわけでもなかったのである。それ故に、エンゲルスほどの天分の持ち主ではあっても、資本主義社会をしっかりと把えきることができなかったのであり、これが国家、社会の把握にも影響を及ぼしたのであろう。といて、こうした資本主義勃興の真っ只中とあっては、前時代に属するとも言えるヘーゲルに学び続けるということは、社会の流れに背を向けるかにも思えることであり、若きエンゲルスにとっては困難なことであったと思われる。すべてを時代性に解消するわけにはいかないが、あらためてヘーゲルの「ミネルヴァの梟は黄昏をまっけて飛ぶ」という名言が脳裏を横切る。

しかし、エンゲルスらとは時代を異にする我々は、ヘーゲルに戻って学び、コント、スペンサーの社会を丸ごと把握しようとする試み、特に、コントの精神の発展と社会の発展とを統一的に把えようとする試みを再生すべきである。全体的にみればエンゲルスはコントをはるかに凌駕する巨人であろうが、ことこの試みに関してはコントの方が上であるといえよう。もちろん、これは極めて困難な道ではあるが、試みる価値だけは充分にあるであろう。

(註1) 現在の日本を例にあげれば、最近刊行された『岩波講座現代社会学』全27巻では、「時間と空間の社会学」(第6巻)、「ライフコースの社会学」(第9巻)、「セクシュアリティの社会学」(第10巻)といった具合に様々な社会学が並んでいる。

(註2) 現代哲学の混迷に関しては、以下のようにK・ヤスパースがその著作の冒頭で、嘆いている通りであろう。
哲学とは何でありいかなる価値をいっているかという問題については、議論が定まってははいない。哲学は、大変な真理を開示するものだとも期待されることもあれば、逆に空虚な思惟として冷淡に見捨てられることもある。『哲学とは何か』林田新二訳 新装版 5頁 白水社 1986年

(註3) エンゲルスがすでに『自然の弁証法』でコントの学問の発展段階に関する説を以下のように批判している。
いかにコントがサン・シモンからの剽窃である自然科学の百科全書的配列の書の著者たりえないかは、この配列が彼〔にあっては〕教材と課程の配列という目的以上に、またしたがってそこでは一つの科学が究めつくされるごとに他の科学がやっと始まるという狂気じみた全科教育になりおわっているということからも、すでに明らかである『自然の弁証法 2』菅原 仰訳 改訳版 347頁 大月書店国民文庫 1970年

また、『唯物論と経験批判論』(レーニン 寺沢恒信訳 新訳版 1975年 大月書店国民文庫)の末尾の人名索引をみる

と、以下のように記述されている。

コント「…革命と社会主義に反対し、資本家と労働者の階級的利益の調和を社会の理想とみなした」19頁

スペンサー「…社会的不平等を正当化しようと努めて…」22頁

(註4) マルクス主義とは、マルクスの見解と学説の体系である。マルクスは、人類の三つのもっとも先進的な国に属する十九世紀の三つの主要な思想的潮流の継承者であり、天才的な完成者であった。この潮流とは、ドイツの古典哲学、イギリスの古典経済学、一般にフランスの革命的諸説と結びついたフランス社会主義である。(以下の文献より引用)

レーニン 『カール・マルクス』全集刊行委員会訳 1版 14~15頁 大月書店国民文庫 1965年

(註5) しかし、なによりもまず三つの偉大な発見のおかげで、自然の諸過程の連関にかんするわれわれの知識は長足の進歩をとげるようになった。……最後はダーウィンがはじめて総合的に展開した証明であって、…(以下の文献より引用)

エンゲルス 『フォイエルバッハ論』藤川寛 秋間実訳 1版 56~57頁 大月書店国民文庫 1972年

(註6) こうしたヘーゲルの体系系の問題、あるいは絶対精神については、すでに南郷継正が『武道と弁証法の理論』(1版 三一書房 1998年)で説いている。

(註7) マルクスはこのことに関して『経済学批判』の序言の中で以下のように述べている。

そして一八四五年の春、……、われわれは、ドイツ哲学のイデオロギーの見解にたいするわれわれの見解を共同してつくりあげること、事実上はわれわれの以前の哲学的意識を清算することを決意した。この企てはヘーゲル以後の哲学の清算というかたちで実行された。

杉本俊朗訳 改訳版 大月書店国民文庫 1966年

(註8) エンゲルスは、晩年の書簡(1890年)のなかで、「後輩たちが時として過度に経済的側面に比重をおくのは、マルクスと私自身で責任をとらなければならぬ点も一部はあります。私たちは反対者たちにたいして彼らが否認するこの主要原理を強調しなければならず、…」と述べているが、同じ書簡のなかで「経済状態は土台です」とはっきり述べている。

『エンゲルスからヨーゼフ・ブロッホへの書簡』マルクス=エンゲルス 8巻選集 第1版 256頁 同254頁 大月書店 1974年)

(註9) エンゲルスに『家族、私有財産および国家の起源』、『猿が人間になるについての労働の役割』といった著作があることからわかるように、彼が事実として歴史を無視したわけではなく、彼の意識としては、むしろ逆であろう。しかし、彼の場合は、歴史から論理を導き出すというより、自己の論理を歴史に当てはめて検証しようという傾向がみられるのである。

(註10) 国家は階級対立の非和解性の産物であり、そのあらわれである。国家は階級対立が客観的に和解しえないところに、またそのときに、そしてその限りにおいて生まれるものである。また逆に、国家の存在は階級対立が非和解的であることを証明するものである。

レーニン 『国家と革命』聴涛弘訳 1版 16頁 新日本出版社新日本文庫 1985年

(註11) 国家という形で、人間を支配する最初のイデオロギー的な力がわれわれに対して現れる。社会は、内外からの攻撃にたいしてその共同の利益を守るために、自分のために一つの機関をつくりだす。この機関が国家権力である。

エンゲルス 『フォイエルバッハ論』藤川寛 秋間実訳 1版 67頁 大月書店国民文庫 1972年

(註12) フォイエルバッハは宗教的あり方を人間的あり方へ解消する。しかし人間性は一箇の個人に内在するいかなる抽象物でもない。その現実性においてはそれは社会的諸関係のアンサンブルである。

マルクス, エンゲルス 『ドイツ・イデオロギー』 真下信一訳 1版 24頁 大月書店国民文庫 1965年

4) ヘーゲル『歴史哲学 中』 武市健人訳 1版 97頁 岩波書店岩波文庫 1971年

5) 『フォイエルバッハ論』 53頁

6) 同上 58~60頁

7) ヘーゲル 『法の哲学』(世界の名著35) 藤野渉 赤澤正敏訳 1版 478頁 中央公論社 1967年

8) 同上480頁

9) 同上414頁

10) 同上497頁

11) 同上414頁

12) 『フォイエルバッハ論』 63頁

13) 同上68頁

引用文献

1) エンゲルス 『フォイエルバッハ論』 藤川覚 秋間実訳 1版 (2)頁 大月書店国民文庫 1972年

2) 同上15~16頁

3) 同上18頁

What sociologists should learn from Hegel

Yukinobu Kato

【Abstract】

Not less than 150 years have past since sociology was systematized, however we can not help admitting that no sociologist succeeds to construct the general image of society at which Comte and Spencer aimed. As a matter of fact, it is very difficult to construct the general image of society, but it is not impossible.

We can get an index of the solution of this problem not only from Comte, Spencer but also from Hegel. He was an eminent philosopher, and also explained the process of the development of mankind by his “Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte” and elucidated for the first time the logical double construction of state and society by his “Grundlinien der Philosophie des Rechts”.

His achievements were succeeded by Engels and others, however Engels flatly denied Hegel’s “absoluter Geist”, which was the essence of his philosophy. So Engels made several mistakes in the succession to Hegel. Therefore we should learn from Hegel himself, not Engels and others.

【Key words】 Sociology, Hegel, Philosophy, Comte, Engels